

カルチュラル・スタディーズと「意味作用の政治学」

粟谷佳司

AWATANI Yoshiji

1. はじめに

こんにち、人文科学、社会科学の全般に渡る活動がなされ、アカデミズムの中に一つの勢力を形成しつつあるカルチュラル・スタディーズは、80年代にアメリカで展開されたことを契機として、全世界的な広がりを見せている。このような潮流については、ある論者によって、「かつてないほどの国際的なブームを迎えている」(Nelson, Treichler, Grossberg, 1992: 1)とも評されており、その研究者の射程も様々な領域に及ぶグローバルな視野を獲得しつつある。また、その活動も、現在の領域と研究者の広がりから、新たな局面を迎えているといえるであろう。

歴史的なコンテクストによれば、現在のカルチュラル・スタディーズは、70年代から80年代にかけて、その中心的役割を担っていたとされる、イギリスのバーミンガム大学現代文化研究センターにまで遡ることができるが、それが80年代に入って解散したことによって、その外延がますます拡がる傾向にあるのが実状である。

視点を日本での受容に移してみれば、最近では、主にエドワード・サイードなどのポスト・コロニアリズムに関連したかたちで紹介されているようであるが、1980年代にカルチュラル・スタディーズが紹介されたときには、主にマス・コミュニケーション研究の分野での紹介であった。現在では、社会思想史や政治学の分野でその取り上げ方が一面的であるとの批判も出始めている。確かに、当時の日本のマス・コミュニケーション研究者のカルチュラル・ス

タディーズに対する内容の理解も十分であったとはいえないが、過渡的なものであったことは否定できない事実である。それは批判されても仕方がない。しかし、バーミンガム大学で行われていたメディア研究によって、カルチュラル・スタディーズがオーバークランドに登場したことは現在の諸研究からでも明らかであり、そこでは彼らがメディアの役割が重要であったと考えていたことを鑑みれば、当時の日本での受容も故なきことではない。

もちろん、カルチュラル・スタディーズはその当初から、「一つのものではないし、決して一つのものではなかった」(Hall 1990: 11)といわれており、カルチュラル・スタディーズの内部には既成のディシプリンに吸収されることを嫌う傾向があるのも事実である。しかし、これは方法論が多様であるということ、その問題関心までが場当たりのものであるということではない。なぜなら、最近のカルチュラル・スタディーズの研究から明らかなように、当時のバーミンガム大学の現代文化研究センターには、イギリスの知的状況から導かれる問題関心があった。それは、レイモンド・ウィリアムズらを範とするイギリスの文化主義やニュー・レフトの流れ、フランスを中心とする構造主義のインパクト、メディア、マス・コミュニケーション研究においては、アメリカの実証的マス・コミュニケーション研究への反発と、アルチュセールの構造主義の受容と批判、グラムシのヘゲモニー論の再定義などを背景としながら、文化の背後にある「政治的なもの」と、その表象である文化の意味作用とのあいだのダイナミズ

ムについて、様々な角度から分析や批判である。

本稿では、このようなカルチュラル・スタディーズの視点を押さえるために、現在もこのムーブメントの中心に位置するスチュアート・ホールの方法論を中心としながら、「アーティキュレーション articulation」の考え方を手がかりにして考察していこうと思う。その際、最近のヨーロッパにおいて新しい政治、社会思想を形成し、社会分析に「言説分析」を取り入れながら「ヘゲモニー hegemony」の再構成を目指すエルネスト・ラクラウやシャントル・ムフらの知見を手がかりにして、彼らに影響力の特に大きかったルイ・アルチュセールの社会理論の受容と批判という側面からアプローチする²。

従来、カルチュラル・スタディーズの試みに対しては、アルチュセールの影響は取り上げられることが多かったのだが（例えば、Grossberg 1993: 28）、しかし、これだけでは十分ではない。ラクラウ、ムフの観点に遡りながらアルチュセールの議論を検証する必要がある。そうすれば、ホールがアルチュセールの「重層的決定」や「複合的全体」、「差異」を彼の方法論に取り入れるために、「アーティキュレーション」の概念がどれほど重要な役割をはたすのかが明らかになる（Hall 1985）。そして、このようなアプローチは、カルチュラル・スタディーズにおけるグラムシの影響（例えば、「ヘゲモニー」概念）や、方法論において多用されるその他の重要な概念（「イデオロギー ideology」、「表象 representation」、「意味作用 signification」、「言説 discourse」）、また、ここから導かれるホールのいう「意味作用の政治学 The politics of signification」（Hall 1982）がどのような性格のものであるのかという理解にもつながるだろう。

ところで、現在の視点から振り返ってみると、アルチュセールは60年代にヨーロッパを席卷した構造主義とネオ・マルクス主義のある意味での象徴であり、その可能性と限界を一身に背負いながらそれらの動向の臨界点をなしていた³。従ってラクラウらも、常にアルチュセールに言及しながらその乗り越えを

計る必要があったのである。もちろん、その影響はカルチュラル・スタディーズにとっても例外ではなかった。ホールは、イギリスのニュー・レフト・ムーブメントとも関係が深く、その当時の思想的状況とも親密な関係にあった。だから、70年代に噴出してきたアルチュセール批判に対しても敏感に反応し、その急先鋒であるラクラウらの観点を参照することによって、カルチュラル・スタディーズの方法論を確立していったのである。

そのために、本稿は以下のような構成を採っている。次の第2節においてアルチュセールの社会理論の構造を剔出し、第3節でアルチュセールを批判的に摂取したラクラウ、ムフの提唱する「アーティキュレーション」の概念について考察する。そして第4節と第5節で、カルチュラル・スタディーズがいかにして「アーティキュレーション」を彼らの研究に取り入れたのかが明らかにされる。

2. アルチュセール社会理論の構成

カルチュラル・スタディーズに影響力の大きかったアルチュセールは、本人は否定しているにも係わらず「構造主義」を代表する思想家として知られている。そして、また、ホールによってもそのように分類されおり、彼の社会理論に対しても一定の評価が与えられている（Hall 1985 1986）。では、アルチュセールのどこが「構造主義」者といわれるのか、彼の採用した社会理論を考察していくことにしよう。

まず最初に、アルチュセールの社会理論を考える上で、その方法論における「理論的アンチ・ヒューマニズム」が有名だが、彼は『マルクスのために』に収められた諸論文でその方法論を練り上げていった。その後、イギリスの共産党員、ジョン・ルイスとの論争を介してそれは頂点に達する（Althusser 1973 1974）。

すなわち、アルチュセールは社会を説明するとき

に、人間主義（ヒューマニズム）と呼ばれる具体的な人間を中心にしてそこから社会が展開するというような方法論を取るのではなく、社会をそれ自体構造として捉える観点から出発しようとするのである。これがアルチュセールの採った理論的アンチ・ヒューマニズムという方法論であった。この時期のアルチュセールの理論的な営為において賭けられていたものは、このことに帰結する。そして、それは彼の卓越したマルクス読解によってもたらされたものであった。

アルチュセールによると、マルクスは、『ドイツ・イデオロギー』以降、「人間主義」から「認識論上の切断」を行ったとされる。それは、例えばマルクスが『経済学批判』の序文において述べた、『ドイツ・イデオロギー』によって「われわれの以前の哲学的意識を清算することを決心した」との件のなかにも現れているという。

そしてアルチュセールが注目するのが、マルクスの「フォイエールバッハにかんするテーゼ」である。

「『フォイエールバッハにかんするテーゼ』は短い文章ではあるが、この切断が前の時期に接する最先端を示すものであり、古い意識と古い言葉のなかで、したがって必然的に平衡を失ったあいまいな概念と定式のなかに、新たな理論的意識がすでに現れている地点をしめすものである。」(ibid 25 訳48)

マルクスは、その第六テーゼにおいて、フォイエールバッハのいう人間が本来的に類の普遍性を内在しているものとしての「類の本質存在」を批判しながら次のように述べている。

「人間の本質はなにも個々の個人に内在する抽象体ではない。その現実においてはそれは社会的諸関係の総和である」(マルクス 1956：237)

ここに、アルチュセールはマルクスの「認識論上の切断」を見出す。そして、マルクスから次のような知見を引き出している。すなわち、マルクスは、抽象的な「人間の本質」というような観念を拒絶したということである。

「マルクスが人間の個人—本質という古い一組の概念のかわりに、新しい概念（生産力、生産関係など）を導入するとき、じっさい、彼は同時に、「哲学」の新しい見解を提出しているのだ。」(Althusser 1965：235 訳407)

そこで取り上げられるのが「社会的諸関係」である。すなわち、マルクスのいう「社会的諸関係」とは「生産力」や「生産関係」が含まれているということである。これは、「人間」とは何やら抽象的な単一の「本質」を持った単体としては存在せず、「生産力」や「生産関係」が含まれている「社会的諸関係」のなかで存在しているということである。

もちろんアルチュセールは人間そのものを否定しているわけではなく、人間というような観念（彼によるとブルジョア・イデオロギー）がどのように析出されているのか、その条件を明らかにするためにこのような方法をとるわけである。ここからアルチュセールは、「人間」によらずに「構造」を中心とした社会理論を構想することになる。

では、「構造」を中心として、アルチュセールは社会をどのようなものと捉えているのか。そして、社会はどのように維持されているのか。

アルチュセールは、社会編制（政治的、経済的、イデオロギー的）は、ヘーゲル流の「それぞれの要素が、「全体的部分」として、全体性全体を表出するものであるような、「精神的」全体を有することをまさに前提に」(Althusser 1965, 1994：403 訳270)する、「その原理として、問題の全体が単一の内在性をもった一つの原理、すなわち一つの内在的本質に還元される」(ibid 402 訳270)といわれる「表出的因果性」のカテゴリーで考えることが出来ない、という。ヘーゲル流の全体性とは、歴史に外在する「精神」という本質である一つの中心を備えた構造なのである。

しかし、アルチュセールは、そのような全体を社会編制の構造化された「複合的全体」として捉えているのである。それまでのマルクス主義の考えでは、

上部構造は下部構造の反映に過ぎず、複合的なものとは捉えられていなかったことから考えても、アルチュセールのいう「複合的全体」は、その後の文化研究において大きな影響力を持ったのである⁴。

では、アルチュセールは、構造をヘーゲルの全体性からどのように区別したのだろうか。

ここで登場するのが、「構造的因果性」という概念である。構造的因果性という概念を導入することによって、全体が、構造的なものとして、つまりヘーゲルの全体という統一体のタイプとは全く異なった統一体のタイプを保有するものとして措定され、事情は異なったものとなる、ということである。少し長くなるが、当該箇所を引用しておこう。

「その構造[構造的因果性]は、経済的諸現象に外在し、それらの現象の外見と諸形態と諸関係を修正し、それらの現象に対してそれらに外在しているが故に不在の原因として効力を及ぼすような一つの本質ではない。構造のその結果に対する「換喩を用いた因果律」における原因の不在は、経済的諸現象に対する構造の外在性の故ではなく、それとは反対に、構造のその結果における構造としての内在性の形態そのものなのである。それ故、こういうことは諸結果が構造に外在していないということ、構造がその自らの印をしるしにやってくるような既存の対象、要素、空間ではないということを意味している。それとは正反対に、構造がその結果に内在し、スピノザ流に言えば、原因がその結果に内在しているということを意味しているのであり、構造の全存在がその結果の中にあるということ、つまり、自らの諸要素の種別的組み合わせであるに過ぎない構造がその結果の埒外には決してないということを意味しているのである。」(Althusser 1965, 1996: 405 訳272-273)

引用からわかるように、ここでは、構造と呼ばれるものは、経済に外在し、結果として全ての現象を統括するというようなヘーゲルのいうところの「精神」のようなものとして想定されていない。ヘーゲ

ルは「原因」を「精神」に求めたが、アルチュセールによれば、そもそも「原因」という「本質」を措定することが誤りであり、構造は、そうではなくて、「原因」さえもが「結果」に既に内在しているというような、構造自体による構造の閉じられた円環の内部での再生産が強調されているのである⁵。そして、この構造は「経済的諸現象」に「外在」していないということは留意しておく必要がある。

このようなアルチュセールのいう複合的全体は、社会の「相対的に自律する」諸審級が「重層的に決定」された形を含み込んでいる。

「じっさい、ヘーゲルの矛盾は、重層的に決定されているかのようなあらゆる外観をしばしばしめすにもかかわらず、現実には決して重層的に決定されていない。」(Althusser 1965: 100 訳165)

ここでいわれる「重層的決定」とは、社会編制を、上部構造、下部構造、イデオロギーなどの諸々の要素によって重層的に決定されたものとして構想するものである。

「これ[マルクスの全体]は、その統一性が、ライプニッツやヘーゲルの全体の表出的、つまり「精神的」統一体であるどころか、あるタイプの複合体、つまり経済の審級によって最終的に固定される諸々の種別的決定因子の様式に従ってそれぞれ分節/接合されては、複合的な構造的統一体のなかで共存する、それぞれ異なり「相対的に自律した」諸水準あるいは諸審級を内包した構造化した全体の統一性によって構成されているのである。」(Althusser 1965, 1996: 280-281 訳146-147)

そして、このような「重層的決定」は「最終審級における経済の決定」からは「相対的自律性」を獲得している。

「つまり、一方では(経済的)生産様式による最終審級における決定があり、他方では上部構造の相対的自律性とその独自の有効性がある」(Althusser 1965: 111 訳182)

しかし、この複合的全体は、諸審級は相対的には

自律していても、一つの要素が支配的になっていて、それを決定するある原理によって統一されている。これが「最終審級における経済の決定」といわれるものであり、社会編制においてどの要素が支配的になるかは、経済的土台が最終審級において決定するといわれている。だから、やはり重層的決定も相対的にしか自律していないのであり、最終的あるいは最終審級においては経済の決定を免れえない。もちろん「最終審級における経済の決定」とは、社会の諸審級の「相対的自律性」においては不在であり「最初の瞬間にせよ、最後の瞬間にせよ、「最終審級」という孤独な時の鐘が鳴ることはけっしてない」(Althusser 1965: 113 訳185) のだが、不在の現前として常に前提にされており、そして最終的に決定される構造の再生産による「原因」が内在する「結果」として描かれているのである。

確かに、アルチュセールのいう社会は、既に構造化された構造の内部で「原因」によらずに「結果」を「構造」の再生産によって自己産出していくというプロセスが強調されていた。そして、そのような構造は中心を欠いているとされるのであるが、ここで重要な役割を演じるのが経済の審級であった。だから、結局のところ、これは全てを経済によって説明しようとする「最終審級における経済の決定」を言い換えたものに過ぎないのである。アルチュセールも、不在の現前であれ何であれ、最終的には「経済」という「本質」を措定してしまっているのであった。そのため、アルチュセールの議論は「正統派」として、バリー・ヒンデス、ポール・ハーストラの「ポスト・アルチュセール派」や、ラク라우、ムフなどに批判されることになるのである。

アルチュセールの「重層的決定」の概念などは、ホールによって評価され、彼の方法論にも引用されているのだが、いくつかの保留がつけられている。やはり、それは「最終審級における経済の決定」や「構造的因果性」の問題である。ホールは、ここでラク라우らのアルチュセール理論の再解釈による

「アーティキュレーション」の概念に注目するのである (Hall 1985: 112)。

3. 「重層的決定」と「アーティキュレーション」

ラク라우とムフは、アルチュセールが成し遂げることが出来なかった「社会的全体性」のなかに本来の意味での「重層的決定」を介入させるために、「ヘゲモニー」概念の再構成と、それが現れる条件である「アーティキュレーションの実践」を中心的な課題として彼らの社会理論を構想している。そのためには、アルチュセールの基本概念を崩壊させるようなやり方で急進化させる必要があった。

ラク라우やムフは、アルチュセールの「重層的決定」の含意が、本来は社会が本質による必然性に還元されるものではないということを鋭く看取っている。そして、アルチュセールの「経済による最終審級の決定」を「重層的決定」から分離させることによって、アルチュセールにさえもつきまとっていた本質主義の批判を徹底していくことをその課題としたのである。

(1) 社会の不可能性

アルチュセールの理論構成については、「重層的決定」という実りの多い概念が、「最終審級」における「経済の決定」という概念に収斂させてしまうことによる、機能主義的な予定調和のモデルになっているということに対する批判であった。

このようなアルチュセールと機能主義の「相同性」を指摘しているのはギデンズである。周知のように、構造機能主義者のパーソンズはパーソナリティと社会システムの統合を規範的価値から説明する。すなわち、一方のパーソナリティは規範的な価値を内面化することによって、他方の社会システムは、制度化された規範としての道徳的合意を形成することによってシステム統合が計られるのである。これがアルチュセールの場合は、ギデンズもいうように構造、

経済、イデオロギーに置き換えられることによって説明され、結局のところ両者の理論構造は平行であるという (Giddens 1979=1989 56-57)。

確かに、アルチュセールの「構造的因果性」の概念は社会の複合的性質をあらわすのに重要な貢献があった。しかし、ここでは、ヘーゲルのような「精神」が「経済」に置き換わっているだけであり、「原因が内在している結果」という折角の因果的な「本質」批判が、「経済」という因果的な「本質」に収斂されることになってしまっている。また、これでは社会の本質的な不可能性を示すことになる「重層的決定」や「差異」の概念が活かされず、本人は否定しているにも係わらず、機能主義的な予定調和のモデルとなってしまうとの批判をされることになるのである (Althusser 1976, 1995)。

問題点はまだある。それは、アルチュセールが最後のところで「最終審級における経済の決定」を維持するために、彼の議論に齟齬が出てくるのである。ラクラウとムフがいうように、

「経済が、どんなタイプの社会においても、最終審級で決定しうるのであれば、それは少なくともこの最終審級との関連では、私たちが直面しているのは、単なる決定であり、重層決定ではないということの意味している。社会が、自らの運動法則を決定する最終審級を持っているなら、重層的に決定された諸審級と最終審級との関係は、後者による単純で一方的な決定として理解されなければならない。…つまり、それ[重層決定]は本質的決定と対立する、偶発的変動の場となるのである。そして、社会が実際に最終的で本質的な決定を持っているなら、差異は構成的ではなく、社会的なものは合理主義的パラダイムの縫合された空間の中に統一されてしまう。」 (Laclau, Mouffe 1985: 99 訳 160-161)

だから、ラクラウとムフは、ここから、経済決定の不可能性を示すことによって、社会の統一性に疑問を呈する。そして、「重層決定」を「最終審級における経済の決定」から分離させることによって、

社会というものは、ヘゲモニックな「差異」をはらんだ偶発的変動の場として定義されることになるのである。

ラクラウは最終的には、結局のところアルチュセールでさえも乗り越えることが出来なかった、一つの支配的な構造 (あるいは生産様式) によって統一体をなしているというような社会の構想は不可能であるという結論に達することになる。そして、アルチュセールのテーゼから「最終審級における経済の決定」さえも取り払ってしまって、社会を偶発的な諸要素の「差異」のせめぎあいと捉えるのである。

(2) ヘゲモニーとアーティキュレーション

ラクラウとムフは、ヘーゲルからアルチュセールへと続く社会編制を予定調和的な全体性とする思考に対して、そこにヘゲモニー概念を導入することで、偶発性が生まれるという。

社会編制にヘゲモニー概念を導入するにあたって、ラクラウとムフは、アルチュセールの「重層的決定」という実りの多い概念が「経済による最終審級における決定」に収斂されてしまうことを批判し、そこから「重層的決定」を分離させながら彼らの社会理論に取り込んでゆく。ここで、ラクラウらはこの「重層的決定」という概念が精神分析学から借用された際のもともとの意味に注目する (Laclau, Mouffe 1985: 97-98 訳 158-159)。精神分析においては「重層的決定」は、象徴的次元の場において構成される意味の「融合」とであるとされる。例えば、「薔薇は愛の象徴である」 (Laclau 1990: 123) というときには、そもそも何の結びつきもない「薔薇」と「愛」が象徴的次元で「融合」された結果、そのような意味が形作られるといえるだろう。ソシュールに始まる記号論の指摘を待つまでもなく、意味表現 (シニフィアン) と意味内容 (シニフィエ) の間には必然的な結びつきはないのである。むしろバルトの記号論などの有名な図式では、意味表現は過剰なものとして描かれている。そうすると、アルチュセ

ールのいう社会的なもののなかに一切が重層的に決定されているとは、社会的なものが象徴秩序によって構成されているということになるだろう。だから、そのような象徴秩序においては、原因となる本質とその現れである現象というような二分法で採用されるような社会関係を欠いているという事になるのである。

しかしアルチュセールは、このような実り多い概念を、「経済による最終審級における決定」という「本質」に最終的に還元してしまうことによって、「重層的決定」を結果的に予定調和として収斂させる単純な決定に陥れたというのである。

ここから、ラクラウらは「重層的決定」を次のように定義し直す。

「[重層的決定の論理は] 正統派 [マルクス主義] の本質主義との切断を、その諸カテゴリーの論理的な分解—分解された諸要素のアイデンティティを結果として固定するよう—を通してではなく、あらゆるタイプの固定制への批判を通じて、一切のアイデンティティの不完全で開かれ、政治的に交渉可能な性格の肯定を通じて行うことであった。」(Laclau, Mouffe 1985: 104 訳168)

ラクラウらは、「社会的なものthe social」を、合理的で組織的な構造である「社会」から区別しながら、現在みられるような「新しい社会運動」は「社会」に対して「社会的なもの」の「過剰」を示している、という (Laclau, Mouffe 1985 1 訳8)。ここでは、「社会的なもの」が常に「矛盾」や「差異」をはらみながら構成されていて、それはもちろん最終的に経済においては決定されずに、過剰なものを内包したものとして捉えられているのである。たしかに、「重層的決定」という訳語は、そもそもその原語に照らしてみると、「過剰決定」と訳すことが出来るわけであり、ラクラウらはアルチュセールの定義をこの術語の持つもとの意味に戻したといえるのではないだろうか。そして、ラクラウはこの「重層的決定」により、「社会の不可能性」(Laclau 1990: 89-92) と

いう命題に達することになる。それには、アーティキュレーションを理解することによって、ラクラウがそこにどのような意味を込めているのかを知る必要がある。

ラクラウとムフは、アーティキュレーションをヘゲモニーと関連づけながら、次のように規定している (Laclau, Mouffe 1985: 105-114 訳169-183)。すなわち、アーティキュレーションは、ある状態において二つの異なる社会的な諸要素を区分けし、かつ結びつける言説的实践である。このような諸要素が結びついたものが言説と呼ばれる。そして、言説の中で接合されているものが「契機」と呼ばれ、言説的に接合されていないものの全てが「要素」と呼ばれる。

アーティキュレーションによって「諸要素」は統合されるが、それは断片化する前の本質的な全体性へと統合するのではなく偶然的に結合して組織する。ラクラウらは、対象として認識されるものを所与のものとは考えずに、それは常に「言説的全体性 discursive totalities」の内部で接合された articulated ものと捉えている (Laclau 1990: 109)。つまり、アーティキュレーションは本質的には何の結びつきのない要素を言説的に結びつける実践なのである。

そして、このような議論において重要な位置を占めるのがヘゲモニーという概念であった。すでに、ホールらが参照したようにグラムシによってヘゲモニーは「あれやこれやの傾向に対する有利であったり不利であったりする……移動する均衡 moving equilibrium」(Clarke et al 1975: 40) と定義されていたが、ラクラウとムフはヘゲモニーについて以下のように述べている。

「ヘゲモニーが出現する一般的な場は、アーティキュレーションの実践の場、すなわち、「諸要素」が「諸契機」に結晶化してはいかないような場である。……ヘゲモニーは社会的なものの不完全で開かれた性格を前提するがゆえに、アーティキュレーションの実践に支配された場においてしか起こりえな

いのである。」(Laclau Mouffe 1985:134 訳213)

先ほど考察したように、ラクラウらがアルチュセールの「過剰決定」を重視し、合理的で組織的な構造へと閉じられる「社会の不可能性」を宣言するのは、このような理由によるものであった。つまり、ラクラウの言う「社会的なもの」は、完全に固定されることのない想像的な「過剰決定」の場として想定されるのである。だから、アーティキュレーションにおける「社会的なもの」は、閉じられた構造とは矛盾し、常に「過剰」に対して開かれていることになる。「差異」の運動もここから導かれるだろう。

そして、ヘゲモニーが出現する一般的な場におけるアーティキュレーションは、「諸要素」が偶発的に言説化される闘争の場として想定されているのである。これがラクラウのいう「社会的ものの論理 the logic of the social」(Laclau Mouffe 1985:3 訳8)なのである。

4、カルチュラル・スタディーズにおける アーティキュレーション

ラクラウらによって、アーティキュレーションは還元主義reductionism(経済還元、階級還元)と本質主義essentialismに陥ることなく社会編制を性格づけるものとして理解されていた。もともと、カルチュラル・スタディーズの理論を形成するにあたってその源泉の一つとされ、後に文化主義と呼ばれることになるレイモンド・ウィリアムズやリチャード・ホガートらにおいても、経済還元主義に対しては疑問が提出されてきたのだが、しかし彼らには「この特殊性を理論的に作り出す適切な方法を」欠いていたのであった(Hall 1986:45)。このような傾向は、文化主義が生産様式や階級への還元へ後戻りしていることから窺える。例えば、ホガートの著作にそれが顕著であるということである(例えば『読み書き能力の効用』)。

アーティキュレーションを導入することによって、ホールは、還元主義や本質主義からをも決別したのである。これは、カルチュラル・スタディーズにおいては、コミュニケーションのモデルからコンテクストの理論への転換としても位置づけられる。記号は意味の透明な伝達の媒体などではない、というテーゼはアーティキュレーションの、そして「批判的パラダイム」(Hall 1982)であるカルチュラル・スタディーズの基本命題である。このような場においては、常にコンテクストが参照され、ホールのいう「意味をめぐる闘争」の舞台となるのである。

ところで、アーティキュレーションの発展におけるホールの貢献について、ジェニファー・ダリル・スラックスは次のように整理している。(1) 還元の拒否。(2) 言説をその他の社会権力へ接合することの重要性を明らかにした。(3) ホールのアーティキュレーションの戦略的特徴への関与は、カルチュラル・スタディーズの社会権力への干渉の関与を前面に押し出した。(4) ホールのアーティキュレーションの文化研究への適応は、さまざまな研究者に支持され接近可能なものにした(Slacks 1996:112)。このなかで、(2)と(3)は次節でホールの研究の中からそのメカニズムを探ることにする。

また、スラックスによるとアーティキュレーションは、認識論的、政治的、戦略的レベルでも働くと言われる。前節で述べたラクラウらの議論との対応を見ておくことにしよう。

まず認識論的レベルでは、諸現象と認識のあいだの対応correspondence、非対応non correspondenceと矛盾として働くことになる。ここでは諸現象と言説のあいだには本質的な結びつきはなく、単純に本質に還元されない矛盾として現れるということである。

次の政治的レベルでは、支配と従属の関係に伴う権力の構造と作用として働く。これはアーティキュレーションの実践の場におけるヘゲモニーが出現する場のことである。

そして、戦略的レベルでは、社会編制、局面(情

況) conjuncture、コンテキストの内部での干渉 inventionのメカニズムが探られる。ここで、ホールはロシアの言語哲学者、ミハイル・バフチン⁷⁾の「イデオロギー的記号の多強調性 multi-accentuality of ideological sign」(バフチン 1929. 1930=1989 Morris ed. 1994: 55) の概念に注目し、アーティキュレーションと絡めながら、言語における「差異」を発見していくことになる。これが、コンテキストの内部での干渉の議論である。

バフチンは、記号がそれを使う人や状況に応じて多義性を獲得していることに注目している。そこでは、意味は社会闘争の結果としてあり、それは「意味をめぐる闘争」において常に多様性に関わっているということである。これが、「イデオロギー的記号の多強調性」と呼ばれるものであった。

記号はもともと多義性に関わっている。だから、記号がその等価性を獲得するためには言説実践を通して保証されなければならないのである。ホールによると、「言説における闘争」は言説の接合(アーティキュレーション)と非接合(ノン・アーティキュレーション)から成るとされる。結果として、言説実践を通して、この「言説における闘争」は最終的には、「闘争における強制力」、すなわちヘゲモニーの相対的な強さに依存することとなるのである。それはヘゲモニーによって支配されることもあるし、カウンター・ヘゲモニーによって意味が逆転することもある。

ホールは、バフチンの著作から次の一節を引用しながらアーティキュレーションへの重要な貢献を抜き出している(Hall 1982: 80)。

「階級は、記号共同体、つまりイデオロギー的コミュニケーションのために同じ記号の集合を使用する共同体と一致しない。だから、同じ記号を様々な階級が用いる。このため、それぞれのイデオロギー記号のなかで多方向のアクセントが交差している。記号は階級闘争の舞台となっている。」(バフチン 1929.1930=1989: 38 Morris ed. 1994: 55)

このようなバフチンの知見から、言説は社会闘争の場となることができる。もちろん、全ての言説は、世界についてのある定義された前提を内包しているのだが、これはイデオロギーを固定された階級に帰することと同じではない。イデオロギー的な言葉とその要素は階級を横断しながら闘争の場となるのである。

ホールはアーティキュレーションによるイデオロギーの相対的自律性について、次のように述べている。

「階級のポジションから社会集団や個人のイデオロギー的ポジションを読みとるのではなく、どのように意味をめぐる闘争が導かれるのかということを考慮に入れなければならないという事実は、イデオロギーが(例えば、経済闘争のレベルで)起こり、または他のところで決定される、闘争の単なる反映であることをやめるということを意味している。それはイデオロギーに相対的な独立、また「相対的自律性」を与えるということである。イデオロギーは社会闘争の単なる従属変数であることをやめる。かわりに、イデオロギー的闘争はそれ自体の特殊性、適切性を獲得するのである。」(Hall 1982: 82)

そしてホールは「意味をめぐる闘争」の場として、テレビというメディアにおけるコミュニケーションに注目したのである。

5. コミュニケーションと「意味作用の政治学」

ホールは、彼が「批判的パラダイム」と呼ぶ立場によって、アメリカの実証主義的社会科学にみられるようなマス・コミュニケーション調査を批判している。その問題点をまとめれば、次のようになる。(1) 行動主義的な「刺激—反応」モデルのような「直接的影響」、(2) メディア・テキストが「透明な」意味の伝達者であり、画一的な方法による「メッセージ」であるという概念、(3) 伝統的調査に多くあられる「オーディエンス」の受動的で画一

的な概念、(4) メディアにおけるイデオロギーの問題を適切に扱えない (Hall 1980b : 117-118)。

そして、コミュニケーションによって生まれる「差異」と、イデオロギーにおける「意味をめぐる闘争」の概念を確保するために、ホールは、前節でも言及したバフチンから「イデオロギー的記号の多強調性」という概念に注目するのである。それは、後にピエール・ブルデューが精緻に分析したように、言説はアクセントの置き方によって意味が多様性に関われるということである。

ブルデューは次のように述べている。

「バフチンが思い起こさせるように、革命的な状況においては共通の言語が反対の意味をとるのである。事実、中立の言語というものはないのであって、それはアンケートの結果が示すように、趣味を表現するのに用いられる最もありきたりな形容詞も、しばしば、階級に応じて時には対立しながら異なった意味を担う。」(Bourdieu 1982 : 18)

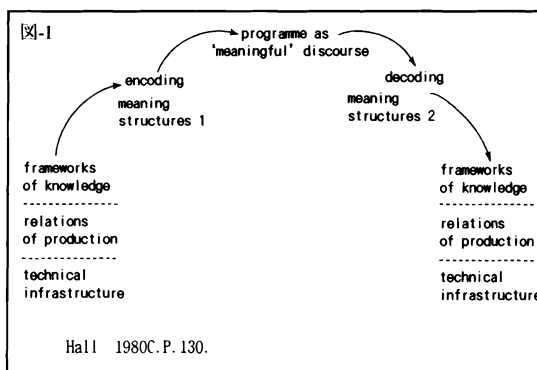
ここでは言説は、単なる透明な意味の媒体としてではなく、「闘争の領域」であることを可能にする。そして、このような知見に基づいて、メッセージの「コード化／読解」モデルが導き出されることになるのである⁸。

ホールによると、伝統的なマス・コミュニケーション研究は、コミュニケーションの過程を、送り手／メッセージ／受け手といった線的なモデル、すなわちメッセージがやりとりされるレベルにのみに注目しており、社会的諸関係の構造のような多様な要素を構造的に概念化していない、と批判する。

そこで、ホールは、これをメッセージの「生産」、「流通」、「分配」、「消費」、「再生産」といったそれぞれの契機が接合articulateされる過程から捉える。もちろん、ここでいわれているそれぞれの契機はそれぞれに固有の存在条件を持っているのだが、ホールが注目するのがこの一連の過程を通して生産されるメッセージの「言説的な生産」の局面であった。

ホールはテレビを例にとり、放送のディスコース

(言説) のなかでメッセージが生産される際に、「言語」の諸規則のなかで構築された象徴的媒介物 symbolic vehicles の形態のなかに生じる」(Hall 1980c : 128) その生産物(メッセージ)があたかも本物であるかのように「現実化」されるプロセスを、制度的—社会的institutional-societal諸関係から、「コード化／読解encoding/decoding」のモデルによって説明する(図-1)。



もちろん「コード化／読解」モデルそれ自体は、マス・コミュニケーション研究においてそんなに目新しいものではない。しかし、ホールはそこに記号論の知見を取り入れ、「意味作用」としての意味の生産が行われる時のメッセージと受容者の間の「差異」のせめぎあいの契機を問題としたのである。

例えばニュースを放送する場合、「生」の歴史的出来事は、決してそのままの形では伝達されずに、テレビのディスコースにおける声と視覚の形式の範囲内でのみ意味されることになる。だから、ディスコースは、ある「支配的」な形式上の規則に従属することになるのである。

「逆説的なことに、その出来事がコミュニケーションされうる出来事になるまえに、それは「ストーリー」に成らなければならないのだ。」(ibid 130)

ここでは、メッセージは「(いかに明確に)「効果」を及ぼすことが可能になり、「必要」を満足させ、または「使用」される前に、まず意味あるディスコースとして充当され、意味あるものとして読解され

なければならない。」(ibid 130)

ここでは、視聴者を「優先的な意味preferred meaning」の中へヒエラルキー的に組織化されるように見えるのだが、後に考察するようにこれは「支配的」ではあるが「決定的」なものではない。

そして、このような過程には、「コード化」、「読解」の契機が存在する。ある決定的な契機において、放送の諸構造はコードを使い「メッセージ」を生み出す(コード化)、別の決定的な契機において、「メッセージ」はその読解を通じて、社会的諸実践の構造の中に現れる(読解)。「メッセージ」は、それまでのマスコミュニケーション研究で見られたような、効果、使用、満足というような実証的な研究によって同定される、理解の諸構造によって組み立てられたものであるのだが、同時に、図に見られる下から「技術基盤」、「生産関係」、「知識の枠組み」へと上がっていく社会的、経済的、そして文化的関係によって生産されてもいるのである。

しかし、「情報源」のコードと「受信者」のコードの間には非対称性が存在し、また、そこに付属する「意味構造1」と「意味構造2」は同じものではないために、「歪曲」、「誤解」が生じる可能性が常にあるのである。

「歪曲」、「誤解」と呼ばれるものはまさしく、この双方のコミュニケーションの交換の二つの側の間に等価性が欠けていることから生じる。繰り返しになるが、このことがこの言説的諸契機における、メッセージの「相対的自律性」を、しかし、「決定性」を明確にする。」(ibid 131)

メッセージは一義的に決定されたかたちで受容者に受信されるのではなく、コミュニケーションの「一致correspondence」は、「歪曲」や「誤解」を含んだ複合的な形でコード化／読解のあいだを「接合articulate」する。ホールはここで、読者の読解の過程には三つの立場があるとの想定をして、イギリスの社会学者、フランク・パーキンの理論を応用しながら概念化された、「三つの理論的仮説」によって

それを説明している。「支配的コードdominant code」、「交渉的コードnegotiated code」、「対抗的コードoppositonal code」がそれである。

「支配的コード」は、「含意された意味を完全に、そして歪めることなく受け取り、その意味がコード化された参照コードによってそのメッセージを解読する」(ibid 136) ことであるとされる。これは、「観念的で典型的な「完璧に透明なコミュニケーション」の場合である。」(ibid 136) ここでは、例えばニュースキャスターのような「専門的コードprofessional code」も相対的には独立しているにも関わらず、支配的コードのヘゲモニーの範囲内で支配的定義を再生産する方向に働くこととされる。

次の「交渉的コード」は、適応と対立の契機から成り立っている。「そのような読解は、ヘゲモニー的定義の正統性一般的な意味作用(抽象的)を作り出すことを認めつつ、一方でより制限された状況的な(立場にある)レベルでは、自身の基礎的規則を—例外をはらみながら—作り出す。」(ibid 137)

交渉的コードは、支配的定義に特権的立場を与える一方で、読解のより交渉的な適応を自身の仲間内的なcorporate立場に保持する。

最後の「対抗的コード」は、「視聴者がディスコースによって与えられた、全くの共示的な屈折を完璧に理解しながら、おおびらに逆らうやり方でメッセージを解読すること」(ibid 137-138) である。ここでは、異なった準拠枠を用いて優先的なメッセージを解体するのである。

ホールは、テレビにおけるメッセージとしてのイデオロギーが一義的に決定されて受容者に受け取られているのではなく、その他の契機、すなわち、家族—学校、ジェンダー、社会的コンテクスト、文化的な場の影響(Morley 1980: 173)、そして、パフチンのいう「記号の多強調性」から受容者の読解による意味をめぐる闘争も考察の対象にしなければならないとつけ加える。

この一連の過程から、コミュニケーションにおい

ては、受容者は「優先的な読解」に必ずしも従っているわけではないことが窺える。しかし、全く自由な読解が許されている訳でもないのであるが、ホールは「意味作用の政治学」としての「言説における闘争the struggle in discourse」を、交渉的読解の中に対抗的な読みが与えられる地点に見出しながら、その可能性を探っているのである (ibid 138)。

ホールによって提起された「コード化／読解モデル」の視点は、受容者の能動性への可能性を開いたということで評価されるだろう。しかし、それだけが強調されているわけではない。そこでは、メディアや社会構造との関係における受容者の「創造と束縛」(Moore 1994: 114) という二つの契機が常に視野に入れられているのである。

このような三つのコードと社会的諸関係によって、記号(メッセージ)が様々な局面において「多様なアクセント」を持ったものとして読解されるためのプロセスが具体的に示されているといえるだろう。そして、受容者がメディアによって運ばれるメッセージからズレを見出していく「闘争」の過程の分析に、「記号の多強調性」が用いられるわけである。

6. おわりに

カルチュラル・スタディーズで提唱されているアーティキュレーションについて考えることは、「複合的統一体における差異」(Hall 1985: 93)について考えることの実践になることである。このプロセスは、特殊な歴史的局面における場によって生成し、様々な意味に接合しながら「言説的全体性」を形成するのである。そして、このような場がヘゲモニックに編制されているわけである。ここでいわれている「複合的全体」が、「言説的全体性」を含意することは明らかであろう。そして、アーティキュレーションにおけるイデオロギー闘争においては、構造主義のように超越論的なゼロ点を措定しながら、差

異を隠蔽してしまうような構造のモデルでも対応することもできないのである。

本稿で取り上げた「コード化／読解モデル」は、現在の視点から振り返ってみれば、このような過程を通して、社会編制とメディアの受容者との間に生まれる、メッセージをめぐる「差異」のせめぎ合いが問題とされていたのである。その後、この「差異」の契機が「アーティキュレーション」と接合しながらホールの方法論を形成していくことになる。

結局のところ、ホールのいう「意味作用の政治学」とは、ヘゲモニックな社会編制や、局面(状況) conjuncture、コンテクストの内部での偶発性を促進する干渉inventionのメカニズムが探られるような、イデオロギー的な意味作用の意味への接近をめぐる闘争であると言うことができるだろう。そして、これがカルチュラル・スタディーズ、なかでもホールの方法論における中心的な課題なのであった。

<註>

- 1 ラクラウ、ムフ、ホールは自らの立場を「ポスト・マルクス主義Post Marxism」と称している。なお、「ポスト・マルクス主義」という概念の使われ方には、一定の方法論が共有されている集団のことを指すのではなく、マルクスの理論に忠実な研究者に代わって、ポスト・アルチュセール派などによって「正統派」とも呼ばれているアルチュセール以降を特徴づけるマルクスの理論の乗り越えを志向する研究を指すようである。この潮流の中には、ギデンズやカステル、さらにはウォーラスティン、ハーバマス、レギュラシオン学派も含まれているといわれている。「ポスト・マルクス主義」については、(玉垣 1993)、(今枝 1996)、(吉原 1994)などを参照せよ。ラクラウとムフも、『ニュー・レフト・レビュー』誌上でのノーマン・ジェラスとの論争において、自らのポジションを明確にしている。(Laclau 1990 97-132)。また別の文脈においては、ラクラウ、ムフ、ホールらは「ラディカル・デモクラシー」ともいわれている。(千葉 1996)。
- 2 本稿では、アルチュセールの著作の中でも特別な位置をしめる「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」論文と、カルチュラル・スタディーズとの関係については考察できない。この関係については別稿でラカン派、スクリーン派と関連させながら考察する予定である。なお、註8)も参照。
- 3 「正統派(マルクス主義)」として、アルチュセールはカトラーらに批判されている。(Cutler et al 1977=1986)。
- 4 例えば、芸術研究におけるアルチュセールの貢献については、(Wolff 1993)を参照せよ。
- 5 再生産過程が原因によらずに結果を円環の内部で産出することは、経済学においては既に指摘されていることだが(阪上 1971 40)、興味深いことに、アルチュセールにおける「円環」のモチーフは、最も初期のヘーゲルを扱った論文の中に既に現れている。(今村 1997 106)
- 6 同様の見解は、(布施 1996)においてもなされている。
- 7 『マルクス主義と言語哲学』の作者は、英語圏ではバフチン・サークルのヴォロジノフということになっているが、本稿では、邦訳者の桑野隆氏の表記に従う。同書の訳者解説を参照せよ。
- 8 ホールの「コード化/読解」モデルは、映画研究者のための雑誌『スクリーン』誌上で展開されていた、アルチュセールやラカンの理論を応用した諸研究の批判が含まれているが、そのあたりの事情については稿を改めたい。

<参考文献>

- Althusser, Louis. 1965. Pour Marx. Editions la Decouverte.
=1994 河野健二ほか訳『マルクスのために』平凡社。
- Althusser, Louis. et al. 1965, 1996. Lire le Capital. Nouv. ed. Presses Universitaires de France. =1974権寧、神戸仁彦訳『資本論を読む』合同出版。
- Althusser, Louis. 1973. Reponse a John Lewis. =1974 西川長夫訳『歴史・階級・人間』福村出版
- Althusser, Louis. 1976, 1996. 'Note sur les AIE' Sur la reproduction. Presses Universitaires de France.
- Althusser, Louis. 1990. Philosophy and the spontaneous philosophy of the scientists and other essays. Verso.
- Althusser, Louis. 1996. Sur la reproduction. Presses Universitaires de France.
- バフチン、ミハイル 1929. 1930=1989桑野隆訳『マルクス主義と言語哲学』未来社。
- Bourdieu, Pierre. 1982. Ce que parler veut dire. Fayad.
- Clarke, John, Stuart Hall, Tony Jefferson and Brian Roberts. 1976. 'Subculture, Culture and Class: A Theoretical overview'. Stuart Hall et al (eds) . Resistance through Rituals. Routledge.
- Cutler, Antony, Barry Hindess, Paul Hirst and Athar Hussain. 1977. Marx's Capital and Capitalism Today. Volume. 1. =1986. 岡崎二郎ほか訳『資本論と現代資本主義』法政大学出版
- Davies, Ioan. 1995 Cultural Studies and Beyond. Routledge.
- Giddens, Anthony. 1979. Central Problems in Social Theory. =1989. 友枝俊雄ほか訳『社会理論の最前線』、ハーベスト社。
- Gramsci, Antonio. 1971. Selections from the Prison Notebook. International Publishers.
- Grossberg, Lawrence et al (eds) 1992 Cultural Studies. Routledge.
- Grossberg, Lawrence. 1993. 'Formation of Cultural Studies'. Valda Blundell et al (eds) . Relocating Cultural Studies. Routledge.
- Hall, Stuart. 1973. 'A 'Reading' of Marx's 1857 Introduction to the Grundrisse' Centre for Contemporary Cultural Studies. Stencilled Occasional Paper.
- Hall, Stuart. 1974. 'The television discourse-encoding and decoding'. Ann Gray et al (eds) . Studying Culture. Edward Arnold.
- Hall, Stuart. 1977. 'Culture, the Media and the 'Ideological effect''. James Curran et al (eds) . Mass Communication and Society. Edward Arnold.
- Hall, Stuart. 1980. a. 'Cultural Studies and the Centre: some problematics and problems'. Stuart Hall. et al (eds) . Culture, Media, Language: Working Papers in Cultural Studies, 1972-79 Routledge.
- Hall, Stuart. 1980. b. 'Introduction to Media Studies at the Centre'. Stuart Hall et al (eds) . 1980.
- Hall, Stuart. 1980. c. 'Encoding/decoding' Stuart Hall. et al (eds) . 1980.

- Hall, Stuart. 1982. 'The Rediscovery of 'Ideology': Return of the Repressed in Media Studies'. Michael Gurevitch et al (eds) . Culture, Society and the Media. Methuen.
- Hall, Stuart. 1985. 'Signification, Representation, Ideology: Althusser and Post-Structuralist Debate'. Critical Studies in Mass Communication. Vol. 2. no. 2.
- Hall, Stuart. 1986. 'Cultural Studies: Two Paradigms'. Richard Collins et al (eds) . Media, Culture and Society: A Critical Reader. Sage.
- Hall, Stuart. 1988. The Hard Road to Renewal: Thatcherism and the Crisis of the Left. Verso.
- Hall, Stuart. 1990. 'The Emergence of Cultural Studies and the Crisis of the Humanities'. October. 19
- Hall, Stuart. 1992a. 'Cultural Studies and its Theoretical Legacies'. Grossberg, Lawrence et al (eds) 1992. Cultural Studies. Routledge.
- Hall, Stuart. 1992b. 'The Question of Cultural Identities'. Stuart Hall et al (eds) . Modernity and its Future. Polity Press.
- Hall, Stuart. 1996a. 'On Postmodernism and Articulation: An Interview with Stuart Hall'. David Morley et al (eds). Stuart Hall: Critical dialogues in Cultural Studies. Routledge.
- Hall, Stuart. 1996b. 'The Formation of a Diasporic Intellectual: an Interview with Stuart Hall by Kuan-Hsing Chen'. David Morley et al (eds) . Stuart Hall: Critical dialogues in Cultural Studies. Routledge.
- =1996小笠原博毅訳「あるディアスポラ知識人の形成」『思想』1月号
- Hall, Stuart. et al (eds). 1975. Resistance through Rituals: Youth Subculture in Post-war Britain. Routledge.
- Hall, Stuart. et al. 1978. Policing the Crisis: Mugging, the State, and Law and Order. MacMillan.
- Hall, Stuart. et al (eds) . 1980. Culture, Media, Language: Working Papers in Cultural Studies, 1972-79 Routledge.
- Hall, Stuart. et al (eds) . Modernity and its Future. Polity Press.
- 布施哲 1996「理論の抵抗」『現代思想』12月号
- 今枝法之 1996「A・ギデンスの構想力とその知的プロフィール」『ソシオロジ』125号
- 今村仁司 1997『アルチュセール』講談社
- Johnson, Richard. 1986/7 'What is Cultural Studies Anyway? 'Social Text. No. 16
- Laclau, Ernesto. 1977 Politics and Ideology in Marxist Theory: Capitalism, Fascism, Populism. New Left Book.
- Laclau, Ernesto. 1990. New Reflections on the Revolution of Our Time. Verso.
- Laclau, Ernesto and Chantal Mouffe. 1985. Hegemony and Socialist Strategy: Towards a Radical Democratic Politics. Verso.=1992山崎カルルほか訳『ポスト・マルクス主義と政治』大村書店
- マルクス、カール 1956「フォイエールバッハにかんするテーゼ」、『ドイツ・イデオロギー』古在由重訳、岩波文庫
- Morley, David. 1973. 'Reconceptualising the Media Audience: Towards An Ethnography of Audiences' Centre for Contemporary Cultural Studies. Stencilled Occasional Paper. SP. 9.
- Morley, David. 1980. 'Texts, readers, subjects'. Stuart Hall. et al (eds) .1980.
- Morley, David. 1992. 'Psychoanalysis and Cultural Studies: texts, readers, subjects'. Television, Audiences and Cultural Studies. Routledge.
- Morley, David. et al (eds) 1996. Stuart Hall: Critical dialogues in Cultural Studies Routledge.
- Morris, Pam. (ed) . 1994. The Bakhtin Reader. Edward Amord.
- Moore, Shaun. 1993. Interpreting Audiences. Sage.
- Nelson, Cary, Paura A. Treichler and Lawrence Grossberg, 1992. 'Cultural Studies; An Introduction'. Lawrence Grossberg, et al (eds) . Cultural Studies. Routledge.
- 阪上孝 1971.「経済学批判とマルクス歴史理論の形成」『思想』8月号
- Slacks, Jennifer Daryl. 1996. 'The Theory and Method of Articulation in Cultural Studies'. David Morley et al (eds). Stuart Hall: Critical dialogues in Cultural Studies. Routledge.
- 玉垣良典 1993.「資本主義分析の「ポスト・マルクス主義的地平」『経済評論』5月号
- 千葉真 1996.「デモクラシーと政治の概念」『思想』9月号
- Wolff, Janet. 1993. Aesthetics and the Sociology of Art. Ann Arbor Paperbacks.
- 吉原直樹 1992『都市空間の社会理論』東京大学出版会